



運営委員長
大森 孝一

和文誌 耳鼻咽喉科臨床

耳鼻咽喉科臨床学会の学会誌は、1908年3月、京都大学和辻春次教授によって刊行された『耳鼻咽喉科京都臨床』がその原点となります。1925年11月、星野貞次教授によって現在の『耳鼻咽喉科臨床』に改題され、年4回発行されるようになりました。1950年以降は毎月発刊されています【図1】。



図1

学会誌では、明日からすぐにでも役に立つ臨床研究や疫学研究、希少疾患および通常と異なる経過をたどった症例を豊富に提供します。耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域で、特に典型的でない症例に遭遇した際には真っ先に耳鼻咽喉科臨床誌で検索してみてください。

英文誌『International Journal of Practical Otolaryngology』

学会誌のさらなる発展を目指して、和文誌『耳鼻咽喉科臨床』と併せて英文誌『International Journal of Practical Otolaryngology (IJPOL)』を2018年に創刊しました【図2】。出版はThieme社が担当し、オープンアクセスジャーナルのため、すべての論文が無料閲覧可能です。日本の優れた論文を世界に情報発信する絶好の機会となると考えています。

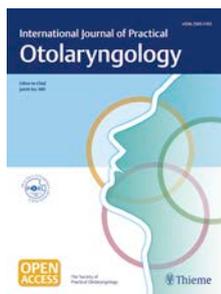


図2

耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会

1926年11月に第1回耳鼻咽喉科臨床学会総会および学術講演会が開催され、第二次世界大戦の休止期間後、1957年に再開されました。1965～1971年までは年2回、1972年以後は現在まで年1回開催されてきました。1985年に学会名は「耳鼻咽喉科臨床学会」と改められました。その名前の通り、臨床に重点を置いた症例報告や臨床統計の発表の場として、若手医師にとって国内での学会発表の登竜門となっています。

臨床研究ワークショップ

医学が直面した諸問題を解決するには、エビデンスが重要とされています。従来ランダム化比較試験(RCT)がエビデンスの高い研究とされてきましたが、今後はリアルワールドに直接アクセスできる臨床研究や、ビッグデータを用いた疫学研究も重要となります。明日からすぐにでも臨床研究や疫学研究を実践するための方法論を、講義とグループワークを通して身に付けることを目標に、年1回「臨床研究ワークショップ」を開催しています。

英語論文ワークショップ

英語論文ワークショップでは英語論文の構成と作法、日本人が陥りやすい英語論文を書くときのピットフォールについて解説を行います。国際的な査読誌に英文論文を掲載することを目標にして、耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会の会期中に開催しています。

耳鼻咽喉科臨床学会賞、学術講演会ポスター賞、優秀発表賞

2021年の第83回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会でも従来通り、優秀な論文に対する学会賞のほか、ポスター賞や優秀発表賞の表彰を行いました。